

まえがき

ワトソンとクリックにより、遺伝子とはDNAの中でタンパク質のアミノ酸配列を決定する情報をもつ部分らしいことがわかったのは、1950年代であった。その後の半世紀は、その構造や機能の研究が推し進められ、21世紀となった現在、脳科学やゲノム解析に基づく高度な先端医療、バイオテクノロジーなどといった応用分野の発展へと繋がっている。私が大学1年生となった1969年はこのような分子生物学の興隆期にあっていたので、学生たちの興味は生化学や遺伝学に集中し、生態学は古典的な博物学に毛の生えたモノと見なされて人気のないことこの上もなかった。

しかし海の向こうでは、すでに生態学にかかわる2種類の新たな研究が進み始めていた。一つは生態学を基礎とした環境問題に対応した研究である。始まりは個別の解決で対応されていたものの、環境汚染が広域化＋複雑化＋悪化し、我々人類の将来にかかわることが世界の共通認識となってきて、現在では、生物多様性などの国際条約まで結ばねばならなくなってしまった。

もう一つは、生物学の概念の革命といえるものであった。「利己的遺伝子」をキーワードに、「個々の生き物は何のために生きているのか」という考え方が転換したのである。すなわち、「種のため」ではなく「自己の子孫を拓げるため」に生きているという考え方への変更であり、行動学や生態学における方法論が根底から覆ったといっても過言ではない。この考え方が日本の生態学界で受け入れられるようになったのは、欧米より少なくとも10年は遅れている。

チョウの研究も同様であった。この新しい考え方を基礎として、欧米では、それまで理解しにくかったチョウの成虫の振る舞いを統一的に説明できるようになり、その結果として得られた様々な知見は、他の生き物の研究の発展や応用に大いに貢献し、この分野における確固たる地位を確保したのである。しかし、それを我が国の関係者たち(?)が受け入れるまでには、やはり、10年以上の月日が必要であった。

今、こうして小さな書齋で、徐々に遠くなっていく研究生活の日々を客観的に振り返ると、改めて、行動学や生態学の様々な研究分野における栄枯盛衰を、見て聞いて、体験していたことがよくわかる。招待された国際学会の基調講演において得意満面で発表した内容など、単に流行の波に乗っていたからであり、人類の長い研究の歴史から見れば泡沫の一つに過ぎないのかもしれない。年をとるとともに一年の過ぎ方は早くなり、遡ること四十数年前から続けてきた研究・教育生活は邯鄲^{うたな}の夢だったのだろうか。しかし、本棚に所狭しと並べられているのは、現実の研究成果としての論文別刷りの束であり、著書であり、報告書である。今、こうして使っているパソコンのハードディスクの奥深くには、調査・実験データや研究室の学生の卒論・修論・博論のファイルが保存されて眠っている。これらのフォルダーを開いてファイル名を見るだけで、あの時代時代を一緒に研究した学生たちの顔や仕草が一瞬で蘇ってくる。

研究の方法論や日本語・英語作文の技術、教育技術など、あらゆる面で指導して下さった先生方の多くはすでに鬼籍に入ってしまった。かつて切磋琢磨した院生仲間たちも続々と定年退職を迎えている。我々の世代とは、ようやく欧米の学問の世界に切り込めるようになり、その結果として各種国際学会を日本で主催できるようになり、それらの裏方を何回も務めてきた世代であった。また、円高

となったおかげで、国外で開催される国際学会へも気軽に参加できるようになり、十分な語学力ではなかったが、欧米の研究者たちと対等に対面で議論できるようになった世代でもある。長期にわたる海外でのフィールド調査も、簡単に行なえるようになった。研究者生活をそのように過ごせることを当然のこととして育った今の若手研究者たちは、「日本の生態学」の学問レベルは欧米と肩を並べ、「坂の上の雲」ではなくなったと考えているかもしれない。しかし、本当に肩を並べたのであろうか？ 欧米人の書いた論文の末尾に引用されている論文リストを見ると、今でも、日本人の論文は圧倒的に少ないのが現実である。

本書では、はるかなる日々にも触れながら、チョウの生態「学」を描いている。おかげさまで、研究者生活の間に著わしたチョウに関する英文論文は、日本よりは海外で数多く引用されてきた。学生・院生たちと一緒に行なった研究も、海外におけるほうが評価は高い。国際学会で院生に発表させ、「良い研究だった」と欧米人から握手してもらうのが、いつしか、研究の生きがいにもなっていた。したがって、これまでの研究をまとめた本書は、日本語で書かれたチョウの生態学の解説書といえるが、我が研究・教育生活の経過記録といえなくもない。そこに果たして、どれだけの価値ある真実が籠められているかは、読者諸賢のご判断にお任せしよう。

いうまでもなく、歴史に「もしも……」はあり得ない。しかし、あの日あれがなければ、今、この書齋の椅子に座っていなかったかもしれない、研究すらしていなかったかもしれないのである。あるいは、たとえ希望通りに研究・教育を行なっていたとしても、学生たちとのそれぞれの出会いがどこかで違っていれば、異なる研究業績となり、結果として異なる研究経歴になっていたかもしれない。そんなあり得ざる歴史に思いを馳せるようになったのも、時間に余裕

vi

をもてるようになったからだろうか。ただし、「六十而耳順」には
ほど遠い。

2018年1月

渡辺 守